

桃太郎侍
いろは剣法

山手樹一郎全集 1

講 談 社

© 山手樹一郎 一九六〇

山手樹一郎全集 1

昭和三十五年九月一日印刷
昭和三十五年九月十日發行

著者 山手樹一郎

装幀者 橋本興家

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽三ノ一九

振替 東京 三九三〇

電話（西一局）大代表 三二二

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大光堂

定価 二六〇円



桃太郎侍・いろは剣法（第一回配本）
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

目次

桃太郎侍……………一

いろは剣法……………三七

桃
太
郎
侍

仮りの宿

一

(おや——)

担ぎ呉服の伊之助は目をみはった。暮れやすい秋の西日が、まだ冷んやりと片側に明るい浅草蔵前通りを着流しに雪駄ばき、卑しからぬ若い浪人者が両国の方へ歩いている。

(たしかに八、九十両、ひょっとしたら百両か——)

伊之助は商売柄、この男一皮むくと、身の軽いところから仲間では猿之助でおる盗兇だ。今はすっかり足を洗っているが、昔の癖でなんとなくその浪人の懐中の金氣にひかれて、駒形あたりからふらふらとつけてきた。別にどうしようと考えたわけではない。

と、今し方その横丁から出た女が、ふと間にはさまって、遅れるでもなく、追いこすでもなく——氣を

つけて見ると、どうやら歩調を合せているらしい。

(畜生——)

只者ではない。酸漿色の珊瑚の根掛けが心憎いばかり粹な銀杏くずし、襟のかかった地味な黄八丈を抜き衣紋にして艶々と白い襟足、顔はわからないが、すらりと肉づきなまめかしい後姿の、どこかに鋭い氣合があふれて、——漫然と歩いているのではない。たしかに狙っているのが、盗人の勘にぴんとくる。

(女拘摸だな)

急に猿の敵愾心が燃えあがった。無論始めから金がほしくてつけていたのではないのだが、敵があらわれたとなると、——しかもそれが女では、意地でも黙って引っこめない。一足先に金を抜いて、女の鼻をあかしてから、無事に元の浪人にかえしてやる、つまり腕くらべだ。

(負けるんじゃねえぞ、猿)

伊之助は背中の荷物を揺りあげて、何気なさそうにあたりを見まわした。人通り絶えない表通りだが、まだ誰もこのふしぎな自分たちの連鎖に氣のついた者はいないらしい。

それは先ずいいとして、伊之助がちょっと困るのは、——どんな嚴重な戸締りでも破って物音を立て

ず、真暗闇を平気で歩いて、ちゃんと金のありかを嗅ぎ出す芸は、猿と呼ばれていささか仲間に知られた手際を持つているが、白昼人の懷中を抜く芸当は、残念ながら自信がない。このままではいかに敵愾心に燃えても、とうてい勝味のないことだ。

しかし、勝ち味がないからといって、ただ相手の仕事の邪魔をしたのでは、なんの手柄にも自慢にもならぬばかりでなく、むしろ盗人仲間の面よごしだ。

(どうしてくれよう)

女のあだっぽい後姿をそれとなく見張りながら、猿の伊之助はすこしあせってきた。

さすがに女も、ちょっと相手に乗ずる隙がないらしい。若い浪人の後姿に、自然とそなわるたしなみがかがわれるのだ。女は取り澄まして気振りにも見せず、伊達の素足に吾妻下駄、裾さばきも軽く、——やがて天王橋へかかろうとすると、

「見つけたぞ、女」

通りあわせた勤番風の二人づれ、その一人がつかつかと、掴みかからんばかりに突然女の前へ立ちはだかった。

馬鹿げた大声だったので、あたりを歩いていたほどの者が、みんなびくくりして立止る。

「なんだ、進藤」

連れの年上らしいのが、いぶかしそうに寄ってきた。どっちも田舎侍らしく、堂々たる体つきの武骨者である。

「それ、この間拙者が品川で、——な、話したろう、あれだ」

先のがいい渋るのを、

「ああ、貴公の胴巻を抜いたという女か」

大きいのが地声で、連れは遠慮がない。

「そ、それだ、その凶太い女だ」

「よし、逃がすな」

肩を怒らせて、退路を断つように後ろへまわる。しかも、柄に手をかけたのは、逃げたら斬る気か——それにしても気の早い男だ。

二

(妙なことになりやがったぞ)

猿の伊之助はちらっと、若い浪人の方をぬすみ見た。百両の鴨である。こいつを逃がしては、意地も腕くらべもない。

が、突然のことに、これも思わず足を止めたという形で、——見ると、鼻筋のおった鷹揚な面立、きり

ッと結んだ唇に決断力の強さを思わせる男らしい侍だ、それが好奇の目をみはって立っているのだ、

（まず鴨の方は大丈夫——）

安心して伊之助は女の方へ目を移した。

全く妙なことになったものである。

「さあ、おとなしく出せ、不埒な奴だ。盗んだ胴巻、

いや、財布だけでもこれへ出せ」

進藤と呼ばれた勤番者が、熊手のような掌を突きつけて喚いているのだ。

「厭ですねぇ」

喚かれた女は、びっくりしたように美しい眉をひそめて、——二十三四でもあろうか、これはまた後姿にも増して、妖艶とも云いたい年増ぶり、

「あたしはついその、代地で踊りの師匠をしている坂東小鈴って女です。なにかお人違いじゃないんですか」

ちゃんと名乗りをあげて、恐れ気もなく相手の顔を見あげる。

「黙れ黙れッ、坂東だか、小鈴だか知らんが貴様に違ひはない。いくら姿を変えても、拙者の目はごまかせんぞ」

威丈高になつて喚きかえす進藤、

「まあ、あたしがどんな姿で、なにをしたとおっしゃるんです」

小鈴と名乗る女は至極落着いている。

「此奴、ぬけぬけと白をきる気だな。あの時は百姓女に化けおつて、——云いかわした男が江戸にいる。それを追つて故郷を出てきたのだが、途中で路用を費い果した、お恥しいが腹が空いて歩けない、御親切なお武家さまと見て、お縋りするのだと、拙者に泣きつきおつたろう」

勤番者は正直である。もしこの女が本当に胴巻を抜いたのだとすると、その抜いた女をつかまえて、御丁寧にも始めから説明し出した。

（ちえッ、呑気なもんだな）

伊之助は呆れてしまった。物珍しそうに集まつてきた見物が、にやにや笑っている。

「拙者は気の毒に思った。で、品川の茶屋で中食をとつてつかわしたに、いつの間に薬をいれおつたか、

——一本か二本の酒に正体もなく酔いつぶれるような拙者ではない。それが、気がついて見ると、貴様も胴巻も消えている」

「ほ、ほ、お気の毒さまですこと。胴巻が消えたのはお察しいたしますが、その貴様呼ばわりだけは飛んだ

迷惑——」

「迷惑したのは拙者だ。いくら貴様がごまかそうとしても、こっちにはちゃんと証拠があるぞ」

「証拠——」

小鈴は小馬鹿にしたようにわらっている。

「その貴様の左の二の腕に、なんとか命、と男の名がほりものになっているはず、——どうだ、今のうちに素直にあやまってしまった方が身のためだぞ」

「厭ですなあ、お武家さまのくせに、無闇にそんな女の体なんか探りたがるから、胴巻が消えたがるんですわ」

「無礼な、貴様、あくまで白をきる気だな。——よし、化の皮をはいでくれる」

進藤は嚇おどとなって、いきなり女の腕を掴もうとした。

「なにをするんだ。馬鹿」

気の強い女である。ぴしゃりと白い手がその頬へ走って、素早く横へ身をひるがえそうとしたが、そうはいかなかった。

「おのれ——」

退路をふさいでいた男が、豹ひょうのように躍りかかって、背後から小鈴を抱きすくめるように、ぐいと右腕を頸くびに捲くきつけたのだ。

三

「あッ、なにを、——放して」

女はその腕を掻きむしりながら、ばたばたと身をもがく。

「静かにしろ。騒ぐと締め殺すぞ。——進藤、早く女の腕を調べろ」

「よし——」

不覚にも横っ面を殴られて、激怒していた進藤は、ばあんと小鈴の頬へ平手打ちをくれ、荒々しく左手を鷲しゅ掴みにする。

「卑怯者——よくも、あたしを、あたしを」

小鈴は自由にならぬ顔をゆがめて、必死に進藤を蹴ろうとする。たちまち下駄が飛んで、白い脛すねが、乱れた裾すそが——。

（なんでえ、大きな野郎が二人がかりで、ざまはねえや）

少しおとなげないので、見ていた猿の伊之助はさすがに義憤を感じてきた。群集の中にも眉をひそめている者が多い。——これで、問題の刺青はりばいがあったら、どんなことになるだろう。同情とも不安ともつかぬ感情が誰の心にもあるらしい。

「騒ぐな、此奴」

進藤は乱暴にも女の腕を捻じあげ気味に、するりと緋のこぼれる袖口を肩のあたりまで捲りあげた。白々と肉付き豊かな二の腕が秋陽にさらされて、一点の染さえない。

「あつ、消えている」

「馬鹿、刺青が消えるものか」

小鈴は口惜しそうに罵倒した。

「右の腕を見ろ、進藤」

「おお」

しかし、その腕もただ徒らに女盛りの、みなぎる肌の艶かしさを想わせるばかりで――。

「ないか」

「ないな、たしかにこの女なんだが」

進藤は当惑の眉をよせた。

「焼き消すという手があるぞ。もう一度左を調べて見ろ」

こうなると、抱きすくめている方が、どうにも引っこみがつかないのだ。

（おや――）

伊之助はぎょっと目をみはった。――其奴、余程腹の据った奴と見えて、喚きながら、早くも事面倒と思

ったのだらう、顎へまいている手にじんわりと力を入れて、締め落しにかかっている。

女はもう声も出ない。

「貴公等――」

声をかけて、つかつかとそれへ出た男、――鴨浪人だ。

「いいかげんに許しておやんなさい。若い女一人を可哀そうではないか」

堪りかねたと見えて、語気が鋭い。思わず群衆がひしめき立った。

「なんだ貴様は――」

「まずその女を放しなさい。なにも締め落すことはあるまい」

「なにッ」

凶星を指されて、さすがにはっと女を突っ放しながら、いきなり柄に手をかける。照れかくしだ。

よろよろとよろめいた小鈴は、大地へ崩れるように両手を突いて、蒼白の額へじっとり脂汗をうかべている。肩も胸も切な気に大きく波打っていた。

「名を名乗れ。なんだ、貴様は」

横合から進藤が、これも照れかくしに意気どまざるを得なかったのだらう。

「わしの名が聞きたければ、貴公等、先に名乗りたまえ」

「拙者は進藤儀十郎だ——」

「おれは橋本五郎太、——主名は遠慮する」

「その方が利口だな」

鴨浪人はにこっとわらった。相手二人が眼をむいて
いるだけに、その鷹揚ぶりが人目に立つ。

四

「無駄口を叩かずに名乗れ」

橋本五郎太が詰めよった。——なんのことはない、
女で失敗した気まずさを、ここで取りかえそうといっ
た形だ。

「別に名乗るほどの者ではないが、——わしは素浪人
桃太郎」

「なにッ」

「桃から生れた桃太郎」

鴨浪人はけろりとしている。

（こいつはいい）

猿の伊之助は背中の呉服物を揺りあげて、ふんと鼻
を鳴らした。うれしくなってしまうたのである。

「貴様、我々を愚弄する気だな」

進藤がたちまち憤慨した。

「いや、愚弄はせぬ、桃太郎だから桃太郎と名乗った
まで」

「しからば姓を云え、——姓を」

「姓は鬼退治」

伊之助がどなって、ひょいと人の背へかくれた。ど
つと弥次馬が笑い出す。

「誰だ」

進藤が真っ赤になって、いきり立つのを、

「乗てておけ、進藤」

さすがに五郎太が苦い顔をして、

「貴公、我等になんの用があるのだ」

改めて桃太郎侍の方へ向きなおった。

「いや、女が可哀そうだから、ちょっと口を利いたま
で、——どうやらこれは貴公等の見込みちがいよう
だ。もう許しておやりなさい」

「黙れ、見込みちがいではない。たしかにこの女なの
だ」

進藤はまだ納得せぬ。

その女はやっと立ち上って髪を撫でつけながら、眩
しそうに桃太郎侍をみつめていた。

「しかし、貴公が見たという証拠の刺青はなかったで

「はないか」

「消したのだ。墨で書いておいて、後で消す、やりかねない女だ。余計な口は出さずに、引っこんでいてくれ」

「よろしい、わしは引っこむから、貴公等も引っこみなさい。たとえ事実、この女だったにもせよ、武士が胴巻を抜かれるまで気がつかなかったのは貴公の不覚、今さら往来中で騒ぎ立てるのは恥さらしだ。いさぎよくあきらめることですな」

「なにッ、そんな口を利くところを見ると、さては貴様、この女の同類だな」

口惜しがって、進藤が喰ってかかる。

「そう見えますすかな、もっとも、一度物をとられると、人がみんな泥棒に見えるそうですからな」

軽くかわされて、嚇と逆上したらしい。

「許さん、此奴」

乱暴にも、さっと抜刀してくる。

「たわけ奴」

とっさに体を左にひねって、前のめりに流れてくる利腕を發矢、したたか手刀がはいった。

「あっ」

がらりと刀を取り落して、進藤がよろめく。

「やったな」

横合いから五郎太がすかさず風をまいて斬りつけた。素早く左足を退いてかわし、その極った体勢を利用して、

「えい」

抜き打ちの一刀、——ちようど空を切っておよび腰になった相手の胴へ目にもとまらず、ただし峰打ちだった。

「ううむ」

崩れるように膝を突く五郎太、——桃太郎侍はと見ると、もう刀を鞘に、さっさと人ごみの中へ消えて行く。あまりにも水際立った一瞬の駈引に、群衆は呆氣に取られて声も出なかった。

五

（余計な腕好みだったかな）

やっと群衆の目からのがれて、もう誰もついてこないとわかると、桃太郎侍はほっとして苦笑した。

（しかし、桃太郎とは思いつきだった）

我ながらとぼけていておかしい。しかも、この桃太郎今日から宿なしなのだ。生をうけて二十五年、生みの親とばかり思っていた母千代が乳母とわかり、その

乳母の臨終に意外な身秘密を聞かされて、過去一切を棄てる氣になった自分だ、その人生の門出に、桃太郎の名はふさわしいではないか。

が、物心ついて以来、

「あなたは立派な侍のお子——侍というものは世の中の人のお手本になるものです」

常に誠められて、母と二人江戸の片隅に住み——早く出世してこの慈愛深い母によるこんでもらいたい、槍一筋の武士になったらよろこんでくれるだろうか、一世にうたわれる劍客となって大道場の先生になろうか、——ただ母のよるこびのみが目当であった楽しい生活、その夢が跡形もなく消えたのだ。

「若様、千代は仕合せでございました。勿体ないと思ひながら、生みの子にも勝る孝行をつくしていただいて、日本一の果報者でございます」

乳母は自分に抱かれて、満足そうに死んで行つた。

死んで行く乳母はそれでよからうが、ただ一つの夢である母を失ってしまった自分は、どうすればいいのだ。名乗れぬ父、名乗れぬ兄、そんなものはほしくない。

「母上」

呼べばやっぱり乳母の顔がうかんで、——いや乳母

ではない、千代こそ自分の母だ。生きているかぎり母として千代の面影を抱いて行こう。それには現実の思ひ出が残る家は一切棄てた方がいいと思ひ立って、住み慣れた家に別れてきたのだ。

（つまり宿なし桃太郎、——おれは桃から生れて、千代に育てられたようなものだからな）

天涯孤独、その淋しい心境に秋風が流れて、ふと見上げる空に夕月が白かった。

「お武家様——」

やがて浅草橋に近いあたりである。背後から呼ばれて、

「やあ、お前か」

桃太郎侍は意外な眼をみはった。さっきの女小鈴がすらりと立っているのだ。

「先程は、危いところを、本当に有難うございました」

「わざわざその礼にはおよばぬ」

「いいえ、命の恩人でございますもの」

「そう云えば、危なく締め落されるところだったな」

桃太郎侍は快活に笑つた。その気軽さに釣りこまれたように、

「あんまり様子のいい恰好ではございません。声が出

ないので、私どうしようかと思いました」

小鈴は艶やかな眉をよせて見せた。

「飛んだ災難、まあそう思つて諦めなさい。——失礼」
あつさり踵を返そうとするのを、

「あ、お武家様」

小鈴はあわてて、袖をつかまんばかり。

「いけません、私の家はついこの横丁でございます。

どうぞ、ちよつとお立ちより遊ばして」

「それにはおよばぬ」

「いいえ、それでは私の気がすみません。母にも叱られます。どうぞ、お願い」

いつの間にか本当に袖をつかんでゐるのだ。若いから桃太郎侍、町中で美女にそんな真似をされると、ちよつと照れる。——それに通りかかった担ぎ呉服の中年者が、こつちを見て笑つてゐるのだ。

六

踊りの師匠ということだったが、成程小ぢんまりと黒板塀をまわした粹な住居であつた。玄關わきからすぐ二階の六畳へ通されて、下のことはわからぬが廊下に立つと、狭いなりによく手入れのとどいた小庭が見おろせる。往来一つ越したところを神田川が流れてい

た。

「どうぞ御ゆっくりなすつて下さいまし」

母親だという老婆は、口数少く娘の礼を云つて、早に降りて行つた。

（氣の弱そうな年寄だな）

一人取り残された桃太郎侍は、死んだ乳母と思ひくらべる。千代は物やさしい中にも氣性の勝つた折目正しい母であつた。武士の娘だから町家の女とは比ぶべくもないが、物腰になんともいへぬ氣品があつて、病の床につくまで、一度も寢姿など見せたことがない。いつも自分より早く起き出して、遅く臥所へ入るのだ。「先に寢んでいて下さればよかったのに」
たまに夜更けて出先から歸つた時など、よくこう云うのだが、
「いいえ、これが女に生れてきたものの、つとめなのです」

と、必ず針仕事などしながら待つていて、わらいながら茶をいれてくれた。

（いい母だったなあ）

次第に溶けてくる黄昏の色の中に、又しても桃太郎侍はしみじみとその面影を追つてゐる。

軽い足音が階段をあがってきた。

「すみません、お待たせしました」

小鈴が襖ふすま際に膝ひざをついたが、

「まあ、気の利かない阿母おつかさんたら。——お寒かったでしょう」

急いで廊下の障子を立てて、絹行燈に灯を入れる。

明るくやわらかい灯影がさっと部屋内へ夜を迎えて、
——薄化粧をはいた女の顔が昼より白く生々となまめかしい。少し手間取ったと思ったら、すっかり着換えをすませて、贅沢ぜいたくな絹物をわざと平常着ふだんぎらしくくつろいで着こなしているのだ。

「なんにもございせんけど、ほんの一口」

いつの間に用意したか、階段の襖のかげから膳を運ぶ。銚子が出る。

「いや、それはいかん、わしはすぐ戻るつもりでいたのだ」

桃太郎侍はちよつと当惑とうわくそうな顔をした。事実、すぐ帰るつもりでいたのだし、物堅い母に育てられて、まだこう云う種類の女と差し向いになった経験がないのだから、まして酒などを出されると、固くならざるを得ない。

「まあ、よろしいではございせんか。ほんのお一つ、私のお礼心ですもの」

無理に盃を持たせて、

「長くお引止めしようとは申しません。お家にお待ちかねのお方があるんでござんしょう」

小鈴はそつと顔色をうかがう。

「いや、わしは宿なしだ」

桃太郎侍は正直だった。

「宿なしって」

「天涯孤独、今日から世に棄てられた宿なし桃太郎だ」

「本当ですか」

「本当だ」

「ああわかりました。きっと好きな方がおできになって、少しもお家へよりつかない。それで、見せしめのための御勘当——お手の筋でしょう」

「——」

成程、そんな見方もあるかと桃太郎侍は苦笑した。

「まあ、羨ましい。どんなひとでしょう、旦那様にそんなに可愛がられる方って」

小鈴は如才がない。そういうながらも、しきりに酒をすすめているのだ。

「違う。わしは母の他に女は知らぬ」

桃太郎侍は真面目に弁解するのだ。ぽっと酔が頬に出てきたが、膝一つくずさない。第一、この男は女に盃を差すことさえ知らぬらしい。本当にうぶなんだと、小鈴は面白くなってきた。

「その母に死なれて、急に家が厭になった。なにを見ても思ひ出すことばかりだからな」

「他に御兄弟は」

「ない。母一人子一人、二十何年二人きりで暮らしていたのだ。ここへ寄る気になったのも、実はお前が母に叱られると聞いて、急にうらやましくなったからだ」

大の男に、こんな顔があるだろうかと思われるほど一瞬子供っぽく淋し気にわらう。

「御免なさい。そうとは知らず、勘当だの、好いひとだのって、勝手なことばかり申しあげて」

小鈴はしみじみといいながら、成程、それで大金を持っているのかと、ちらっと男の顔を見あげる。純真そのもののように澄んだきれいな男の眼だ。

「それで、これからどうなさるおつもり」

「わからんなあ、天下の風来坊、今日が宿なし桃太郎の店開きだ」

「勿体ない、私、拾わしていただくかしら」

氣をひくように云って見る。

「止した方がいい。食うより他に能のない男だ」

「お流れを一つ、下さらない」

小鈴はそっとにじり寄った。

「ほう、酒が飲めるのか」

「飲みたくなりましたの、あなたのお酌で」

桃太郎侍は武骨な手つきで、銚子を取りあげた。

（素直な坊やなこと。もうこっちのものだ）

大体男なんて甘いものだ。どんなむずかしい顔をしていても、すぐでれりと参る。また参らせるだけの自信が小鈴にあるのだ。まして世間知らずの青二才など物の数ではない。

「ね、旦那様の本当のお名前を聞かせて下さいましな」

「桃太郎だ」

「あら、人が真面目できいているのに——冷かさないで教えて下さってもいいでしょう」

「だから、桃太郎」

「じゃ、姓は」

「日本——鬼退治でもよい」

わらっているのだ。

(ふん、利いた風なことを。いまに日本一の、でれすけにされるのも知らないで)

小鈴はちよつと癪にさわたが、

「ようござんす、教えて下さらなければ下さらないでも。そのかわり今夜はもうかえしませんからね」

盃をかえしながら流し目にしつとりと風情を含んで。——が、この男には通じぬらしい。

「いや、そんな迷惑をかけてはすまぬ。こうして馳走になるからして分に過ぎると、心苦しいのだ」

「いやですね。命の恩人ですもの。当然じゃありませんか。本当はね。私、虫のいい考えだって笑われるかしら、——もう一つ、お盆を下さい。少し酔わなくちゃ恥しくてお話しできませんわ」

深沈と情熱のみなぎるようなまめかしい肢体をくねらせて、小鈴は大胆にわらって見せた。いつの間にかしどけなくいずまいが乱れて、不謹慎な手が時々男の膝に舐れんばかりである。

「もう酔っているではないか」

「いいえ、もっと酔いたいんです。うれしいんですもの。——でも、桃太郎さんは少しもお酔いになりませんのね、お酌が下手だからかしら」

下からそつと運ぶ銚子の数もやがて四五本、男の様

子はまだ少しも変らないのだ。

八

「酔っていないことはない」

桃太郎侍は端然として答えた。

「だって少しもお乱しにならないではございませんか、あんな真面目なお顔をして」

「婦人の前だから慎しんでいる」

「まあ、憎らしい。それじゃ私が恥しくなりますわね、どうぞ御自分の家だと思って、寛いで下さいよ。」

さあ、お熱いのがきました」

すすめれば決して遠慮はしないが、どうも勝手が違う。どんな媚態を見せても、ただ澄んだきれいな眼が微笑するだけで、少しも女というものを感じていない。

(余つぽど唐変木にできているんだね)

男のくせに、そんなはずはないと、小鈴の方が少し焦れてきた。

「私ね、家が女ばかりで無用心でしょう、ですからちやうどいい桃太郎がどこかに落ちていたらぜひ拾いたいと思つていたんです。そうすればさっきのような田舎侍に馬鹿にされなくてもすむし、——ね、決して御